

昭和四十二年三月

月布川下流における原始時代の遺跡調査報告書

—古式石器の出土地—

大江町教育委員会

昭和四十二年三月

月布川下流における原始時代の遺跡調査報告書

—古式石器の出土地—

山形大学教授

柏

倉

亮

沖

津

常

太

郎

吉

序 文

太古の夜は明けはなれようとしている。まさに黎明期である。朝日連峰に源を発した月布川緑辺の朝霧の中から、カツチンカツチンという石を割る音が響きはじめたとする。このひびきこそ人類最初の生活を営む労作の響きであり、人類文化への一步でもあり、それは悠久な昔日の姿でもあった。

吾が大江地区に在住した人々が最初に残したものは何であつたか、それは即ち石器文化である。それこそ人間が生きるために製作した最初の遺物である。吾が町の歴史もそこから始まつたのである。

頁岩を自分の知恵によって意図のままに打ちくだき、これで食物を切り、又は砕き、毛皮を縫して衣類を調製はしたが、まだ鉄器や土器の使用は知らなかつた。この黎明期においては、石こそ生活をきりひらく道具であり根元でもあつたのである。

こうした人類の最初の生活を解明すべく、雄々しくも研究に取り組んだのがこの研究である。大江町に住む吾々は、誰でも歴史の始めを知り度いと念願していると共に、こうした先人の跡を究め、悠久な歴史を反省することによって、将来の町づくりに多く教えるもの、いわゆる「故きを温ねて新しきを知る」ものであることを確信する次第である。

今回、山形大学柏倉教授・沖津常太郎氏を総帥として、大江町の黎明期の研究にとりくまれ、ここに第一回研究報告書が上梓されるに至りました事を、町民の皆様と共に限りない悦びとするものである。

最後に、この研究に努力下さった柏倉教授・沖津先生はじめ、直接推進に努力下さった諸氏に対し、深甚なる謝意を表するものである。

昭和四十二年三月

大江町長 松田兄弟

序 文

ある日のことであった。この研究の纏めを委嘱した沖津先生が、字下原の地層調査に来られるというので、朝から準備していた。下原の現場は月布川を前にした小見向かいで、標高一二〇mの河段丘であった。一ヵ所の調査を終わり、杉林の中の段丘で一服して後、傍の指示された地点にシャベルを突っ込んだ。真っ黒な土を六〇匁も掘ったと思われた頃「漸移層だ!」との声と共に、一つ、二つ、三つと続けざまに数個の細長い石片が表土に並べられた。石片の赤黒い土をこすっていた沖津先生が「この三片までは石刀型剣片で、石質もよく刃が鋭い、裏の打瘤も完全だ」と説明。急に元気づいてスコップを動かす高山先生の頭も顔も汗の筋を引いて流れている。佐藤先生の吐く息も荒い。その頃シャベルの下は赤土層であった。基盤の底土であろう。半径五〇匁にも満たない場所から、求めていたものがズバリ出土するとは奇跡である。

私は驚いた。大江町の歴史の始めだなんて、華やかに騒ぎたてているが、実際は全く地味な仕事である。度重なる踏査と、シャベルと汗との闘いが集積して、結果されることを如実に知った。

さて、皆さん御苦労様でした。柏倉先生はじめ諸先生の適切な御指導と、直接これに当たられた方々の労苦と、喜んで御手伝い御支援下さった方々の温かい情熱によって、今回第一次的報告書の完成するまでに至った、その勞に心から敬意を表するものであります。

研究のとり纏めを委嘱した柏倉・沖津両先生。地学指導に当たられた青木先生。作図と石器の解説にあたられた宇野先生、写真に専念された菊地氏。研究グループの高山・佐藤両先生。研究に御支援下さった加藤(稔)先生。調査に際し温かく迎えて下さった地主の方々。資料を提出下さった渡辺(正)氏。その他御援助協力下さった諸氏に、厚く御礼申し上げる次第であります。

昭和四十二年三月

大江町教育委員会
教育長 渡辺 次郎

目 次

序 文	大江町長 松田兄弟次郎	一
序 文	大江町教育長 渡辺惣次郎	二
例 言		四
本 文		
一、研究のいきさつ		
二、遺跡周辺の地質・地形		六
三、出土地の概況		十二
四、出土石器		二二
五、附 記		三〇
六、むすび		三六

例　　言

一、この研究にあたっては、大江町当局からの委嘱により、山形大学教授相倉亮吉の総合的な指揮並びに指導によつて進められ、報告書については沖津常太郎がまとめた。

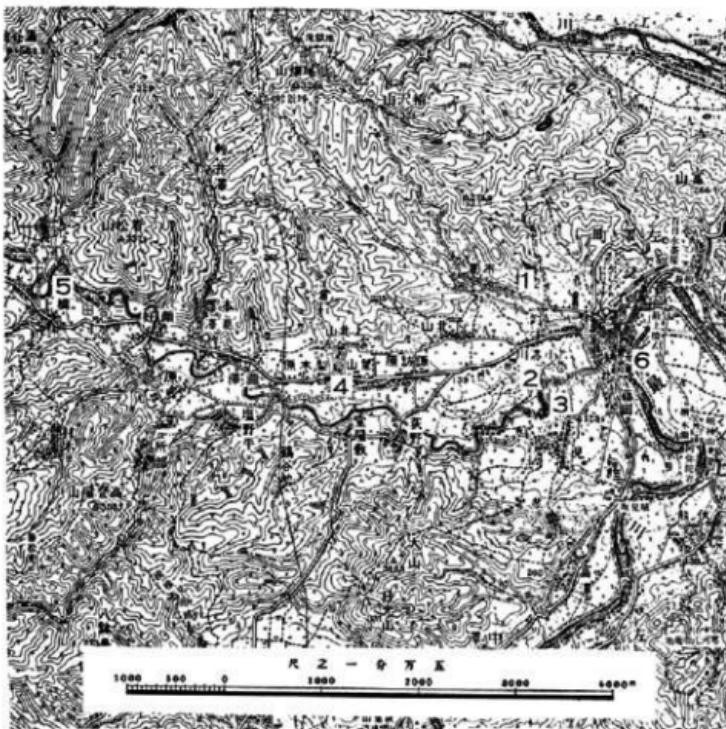
二、地学については山形大学の青木和子博士の指導をうけ、出土品の考証並びに作図については、直接宇野修平があたり、写真に関しては、菊地正道が中心となつて進め、多くの資料を得た。

三、研究グループ活動については高山法彦が主となり佐藤如男が副となつて、直接遺跡の実地調査に精進し、六〇回にわたる踏査の結果についてまとめたものである。

四、研究支援者として特に加藤穂、その他西川光輝、近野正司等各氏の幅広い応援を賜った。

五、この研究は大江町における、歴史のはじめを探求しようとして出発したものであるが、勿論完成されたものではなく、中間発表的なものである。従つてここに対象となつた遺跡の全部が、必ずしも先編文時代のものであるとは限らない。要は今後に多くの課題を残していくのである。特に正式な発掘による調査と、第四紀層の地質調査と相待つて進められる部分の多いことを附言する。

第 I 図 月 布 川 下 流 圖



- | | |
|----------|---------|
| 1. 庚申山遺跡 | 4. 望山遺跡 |
| 2. 下原遺跡 | 5. 楊上遺跡 |
| 3. 小見遺跡 | 6. 向原遺跡 |

一、研究のいきさつ

この研究は、昭和四一年六月二六日、大江町庚申山の南麓（海拔一四八m）、宇下山田己三六四番地森村義三郎氏所有の果樹園整地のため墜落した場所に、多数の貝岩剝片が散在しており、随伴して出土すべき土器は一片もないことに不審をいたいた高山法彦は、若しや先繩文時代のものではないかとの観点から、菊地正道、佐藤如男等の研究同志と協議の結果、前年度において小漆川城跡の研究で関係が深かった筆者に連絡、柏倉先生の指導のもとに研究の歩を進め、海拔二七五米に連なる周辺、市の沢の裏山など限なく調査し、更に小見・下原・望山・漆川・堂が原・羽黒・壇・播磨上・向原など、月布川下流一帯を調査し、更に進んで寒河江市十二堂・同高瀬山・同長岡山・同平野山・同陣ガ峯。西川町間沢の去手呂など抜渉すること六〇余回に及んだが、そのうち庚申山・小見・望山・下原・向原・橋上の六カ所においては、一応の成果をおさめ得たので、その結果をここに報告書として第一次的発表に踏み切った次第である。

ここで研究のいきさつについてもう一つ付言すると、昭和四一年七月二十四日のことである。前年度に完成した小漆川城跡・巨海院山門誌に関する反省会が、巨海院会場で開催されたが、この席には松田町長、町会議員鈴木正美、同村上広志、教育長代理安藤光蔵の諸氏も会合したが、寒河江工業高等学校附近から、先繩文時代の

ものと予想される石器が出土したことの話題となつた際、松田町長から「石器時代における先繩文の遺跡は、海拔と或る点まで一致していると聞くが、吾が大江町から出土しないと言うのは、要するに研究が足らぬからではないか？」。この一語は小漆川城跡研究者にとっては、特に冷水三斗の「喝」であった訳である。

由来、小漆川城跡研究員の次の誤謬は、大江左沢城跡研究だった訳であるが、町長の一語によって、大江町そもそものやり直しも意義あるものと考え、原始時代の研究を進めることに話がまとまつたのである。

そこで現在剝片が出ている下山田の丘陵に対し、天保二年に建立した庚申堂が祀られているところから、松田町長の決定によつて、庚申山云々、天保一二年に建立した庚申堂が祀られているところから、松田町長の決定によつて、庚申山と言ふ名前が誕生したのである。然し庚申山と言えば、如何にも独立した高い山の様な印象を与えるが、地理的に見れば、月布川及び小漆川によつて成立した河段丘に過ぎないのである。

二、遺跡周辺の地質・地形

月布川は朝日山地の小朝日岳に源を發し、東北方に向つて流れ、溪流となつて浸蝕崖を縫いながら大江町古寺を過ぎ、神通境の名勝を東方にかえ、蛇行すること一三・五kmにして大江町左沢附近で最

上川と合流する。

月布川沿岸における地質・地層の大様について見ると、西方朝日山地花崗岩類を最下部とし、東方下流に向って傾斜しながら、第三系金山・水沢・古口・橋上・大谷・稻沢山等の層序で、つぎつぎと若い地層が重なって、最後に河口附近の一帯は第三系で最も新しい左沢層によつて被覆されている。左沢層の厚さは四〇mと四五mと言われ、礫質砂岩・浮石質砂岩・凝灰質砂岩を主体とし泥岩を交えている。

橋上以西の地においては、地殻の変動特に褶曲作用によるものや、南北に走る数条の断層線のため、地層の繰り返しが行なわれ、場所によつては背斜構造となつてゐるところもあり、こうした場所の両翼は著しく急な斜面となつており、一層複雑な構造を示していく。断層は概して南北に走る数条の線が主をなし、小數の東西に走るものを見出している場所もある。

ここで、「山形県地質図」によつて月布川沿辺の地層の順位を挙げると、

番号	地層
1	朝日花崗岩
2	山
3	沢
4	口
5	古
6	水
7	木
8	古
9	水
10	木
11	古
12	水
13	左



第2図 青木和子先生の地質学指導—崖は砂利取り場一

青木博士 沖津 佐藤 沖津（墓）

となつておおり、このうち水沢層は3・5・8。古口層は4・6・9。橋上層は7・10と繰りかえしている。

又、山形大学紀要第四卷第二号（昭三二・五）に発表した山形理

氏の原図による青木和子氏の研究「月布川沿岸の新第三紀堆積岩に関する地質学的研究」には、次のような層序が示されている。



第3図 柏倉教授の現地指導—左沢層と酸化砂鉄層の検討—

沖津 佐藤 柏倉 沖津（教） 高山

番号	地層	巾層
1	層	1.4K
2	層	1.4ヶ
3	層	0.8ヶ
4	層	0.6ヶ
5	層	0.2ヶ
6	層	1.9ヶ
7	層	0.2ヶ
8	層	0.7ヶ
9	層	0.2ヶ
10	層	0.7ヶ
11	層	0.1ヶ
12	層	0.4ヶ
13	層	0.7ヶ
14	層	1.5ヶ
15	層	1.7ヶ
16	層	1.0ヶ

右の表の如く、更に詳細に区分して研究されたものであるが、地層の繰り返しについては、月岡1・7。間沢3・6・12。水沢4・8・10。綱取5・11となつてある。

月布川沿岸は前述の如く先第三紀の花崗岩類と第三系中新世の段丘をはじめとする諸層と、第三系鮮新世の糸沢山及び左沢（小見）の両層が基盤をなしており、その上層を第四系の洪積層・沖積層などが表土となつて被覆しているのである。

こうした月布川の沿岸は地形的にみて、5m・10mの低位段丘。20m・30mの中位段丘。50m・75mの高位段丘をかまえるが、地質的には、これらの段丘は砂礫の堆積を主とする河段丘で、低位段丘には泥炭層を挟んでいる。

ここで本連勝と直接関係をもつ月布川下流における、第四系につ

いて考察してみたい。

月布川の沿辺は、前述の如く複雑に重なり合った第三系の地層が基盤となって、第四系堆積層によって被覆されている。特に洪積世以来、上流で浸食された砂屑物が下流に運搬され、河口附近に扇状地堆積層が形成されるのが一般的であるが、月布川においても河口から五km上流に当る橋上附近から流域が喇叭状に広がり、不完全ながら扇状地の様相をなし、河口では二畳程度に広がりを示している。

この地帶は両岸に河段丘が発達しているが、その構成堆積物は前述の通り砂礫層で、場所によつては砂屑、ローム層を含んでいる。

この第四系堆積物は、或る時代に河口一帯を埋めていた事情が考えられる。即ち堆積が地殻の隆起作用と相待つて、その最盛期には、現在における河口床よりも七五mの高さに達していたらしく、その名残りとして両岸沿辺の標高一八〇mの山腹や山頂に河成堆積としての砂礫が認められる。

かくの如く、一時は最盛期を示した堆積層も、其の後長い年月にわたる浸蝕・運搬作用によって最上川本流に土砂礫を送り、渓谷造成作用が拡大し、河床も低下して、現在の如く両岸に河段丘を残したものと考えられる。而して初期における原始民族は、好んでこうした河口に近い河段丘を生活の場としたらしく、庚申山・小見・望山・下原・向原・橋上の遺跡も、この河段丘に含まれている。

さて、こうした遺跡を含む両岸の河段丘について、その生成され

た順序について比較すると、右岸における河段丘は左岸に比し早期に形成されたものと見ることが出来よう。即ち右岸の小見地帯の河段丘は単純に月布川によって形成されたのに比し、庚申山を含む左



第4図 庚申山ローム層調査

沖津（教） 佐藤 柏倉 沖津



第5図 小見ローム層調査

—黒土の表土25cm～30cm下が茶褐色のローム層—

岸の河段丘は、月布川の外に小塗川（市の沢川）の浸蝕・運搬作用と合わせて造成されたものであり、小塗川は月布川の支流として水量も少なく、造谷作用が遅れ、河谷も狭く、庚申山を含む上位段丘

一帯は、発達した浸蝕崖を残している。更に遺跡そのものについて見ても、月布川床から小見遺跡までの○・三畳に比し、庚申山遺跡は一・一畳。小塗川床から○・三畳の距離である。又、月布川口からこの距離についてみても、小見遺跡は○・七五畳に比し、庚申山遺跡は一・五畳のはなれを示している。

これから述べようとする三つの事項については、頗る微窓下による精密な検査を終えていないので、一概には言えない訳だが、庚申山の頂点標高一七五m一帯に、火山灰を含んでいると見られる、厚さ一mと五〇cm程度のローム層状のものが堆積し、段丘砂礫層の上に冠っている。然しこの層は左岸中位層の小塗川床まで見られない。

一体第四紀においては、本県内の島海・月山・葉山・船形・白鷹・藏王・吾妻等の諸火山が激しく活動し、多量の噴出物が排出し、時には泥岩も流出したと見られ、特に葉山火山は熔岩流と塊泥流の熔岩瓦層が見られ、紫蘇輝石安山岩・普通輝石安山岩・複輝石安山岩から成り、周辺に碎屑物を多量に拋出したと見られているが、ここで火山噴出との関係について考察すると、右岸小見遺跡を含む中位段丘一二五mの場所を試掘の結果、前述した庚申山頂におけるローム層状のものと同種のものと見られる層が発見されたが、この層も庚申山頂の状態と同じく堆積砂礫層の上部を被覆しているものであり、下位段丘にはこの層は認められない。

若し、両ローム層が同類のものと仮定した場合においては、右岸

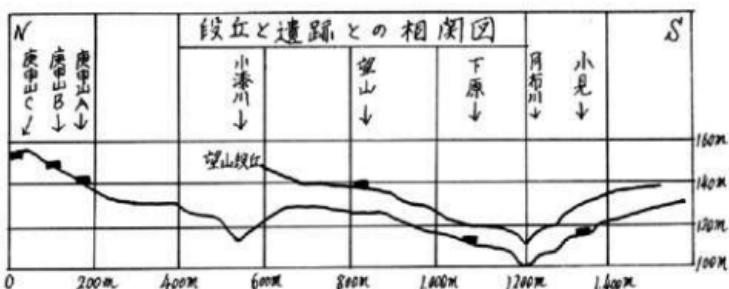
における小見中位段丘が形成された後の陥没があったものと考えられ、この頃左岸においては、ようやく上位段丘が形成されつつあることになる。従ってその後において小瀬川による中位、下位の段丘が造成されたものと思われる。然し、これを以て直ちに小見・庚申山両遺跡に対する年代的な新旧の基準とすることはできないが、一つの参考資料と言えるであろう。

さて、月布川の特徴はと問えば、結局成熟された河川であると答えるであろう。すなわち、寒河江川・朝日川・野川の様ないわゆる荒川に比し、河底の落差が少なく、且つ蛇行帯も十分発達し、この蛇行によって沿岸には自然の貯水場が各所に出来てゐるので、これが上流における森林の発達と相まって、洪水の灾害を防いでいる。かつて、旧制山形高等学校の安斎教授が、土地利用のため附近的町村民が月布川の蛇行帯を直線的に直している工事を見て、「この工事によつて土地が利用される反面、水による灾害を覺悟しなければならない。」と指摘したのは、この間の事情を物語るものであろう。

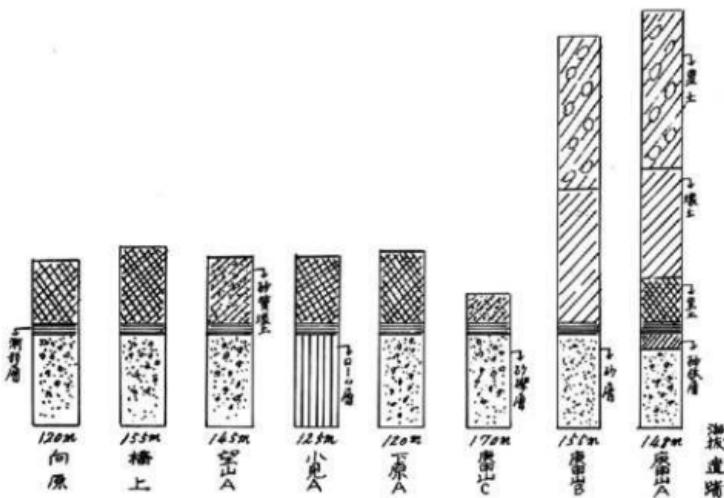
又、川が落ち着くため、長い年月を費して成熟期にはいつただけに、沿岸に河段丘がよく発達し、地味が肥沃で樹木もよく繁茂したから、初期の人類が好んで生活の場としたものと考察される。

ここで小見・下原・望山・庚申山遺跡と、標高並に何段丘との関係について表示すれば第6図の如くなる。又、ここにとりあげた遺跡の地質層序を表示すれば第7図の如くなる。

第6図 段丘と遺跡との相関図



第7図 遺跡の層序比較表



三、出土地の概況

望山遺跡は、大江町大字望山、農業協同組合倉庫の西南方五〇m、なだらかに南方に傾斜する河段丘の林機園の中にある。ここは月布川河床からの比高三五m、標高一四五m、月布川河段丘の中位段丘にあたる。なお、月布川からの距離八〇〇mである。

地層試掘の結果、第一層表土二〇cmと三〇cmの砂質壤土その下に第二層五cm程度の漸移層が認められ、第三層は河段丘を構成している砂礫層である。

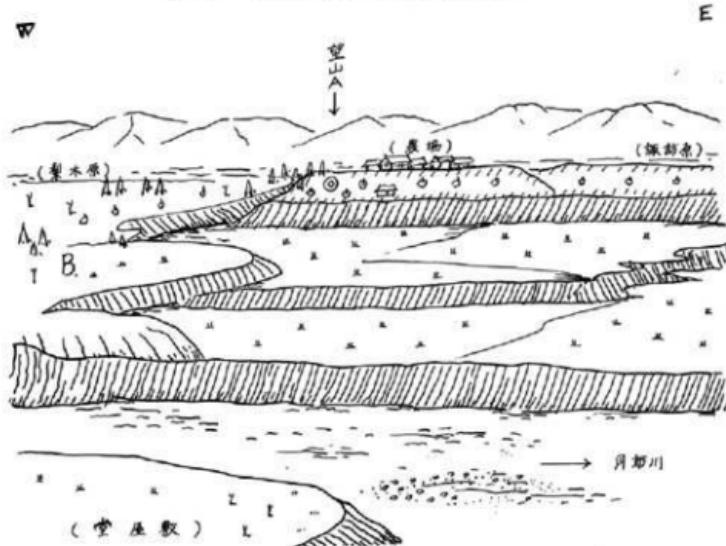
先年農協の倉庫を建設した際、多くの石器の出たことを、地もの林蔵次郎氏が証言しているが、大江町立東部小学校に保存されているのがこれであると言う。

四章の出土石器の項で述べている如く、望山遺跡からは、期待の持てる石核と石器が出ている。

(注)

人類の歴史を地質生成年代と比較した場合、その間には大きな開きがある。第三系で最も新しい左沢層できえ、一、五〇〇万年前。第四紀層生成のはじめは、一〇〇万年と六〇〇万年と云う。この報告書で取扱っている古式石器は一応五、〇〇〇年と一五〇、〇〇〇年以前であろうと思われるものを対象として進めた。

第8図 望山遺跡と月布川河段丘



第9図 望山河段丘と遺跡

—中央建物が農協、その左下が遺跡—

第10図 遠山遺跡



—林の間の向こう側が月布川—

菊地 沖津（教） 沖津 柏倉

あるから、原住民生活の場となつたものであろう。今後正式に発掘を行なえば、月布川下流としては有望な地帯と考えられる。

地層試掘の結果、第一層は二四cm～三〇cm。第二層はやや褐色が

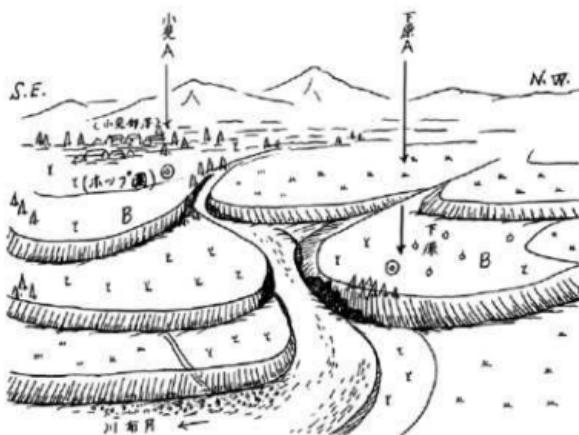


第11図 小見河段丘と遺跡

—中央第三河段丘が遺跡—

かたず漸移層、第三層はローム層で、第四層が河段丘を構成することは、附近の欠け崩れ場所から推考出来る。

第12図 小見道路と月布川河段丘



第13図 貝岩礫の検討



（三）庚申山遺跡

① 庚申山貝岩礫包含層について
庚申山を構成している堆積砂疊層は中腹に露出しており、古来左沢・小澤川地区民の砂利取り場となってきた。特に庚申池の築堤に際しては、主としてこの砂疊によつて完成された。この層の下部は

—砂利取り場前—

沖津 柏倉 佐藤 近野 安藤 高山 西川



第14図 庚申山附近の河段丘 一中央円形の丘が庚申山、ABCは遺跡一

第三系鮮新世左沢層で、砂利を取つたあとを平に均らして、一ヘクタール程度の畑地としている。

現在の砂利取り場は六メートル八メートルの層で、山頂にあたる西に向かって崩されつある。この層の中には直径一〇cmと三〇cm程度の頁岩礫がごろごろ含まれている。この礫

は概して黄褐色で、中には茶褐色の美しい縞模様が入つたものもある。概して色が薄いのは有機質分の含有量が少ないのであると言えよう。然し他の遺跡で出土するチヨコレート色や黒色のものはない。

石器を作る硬質頁岩は、一般に奥山の溪間で長い間晒され、凹凸が縞面に出来て、虫に食い荒されたように古色をおびたものが珍重されているが、こうした縞を剥つてみると、たとえ表面は白っぽけた色でも、中の方はチヨコレート色、又は黒色のおびたものが多い。従つてこれを実際利用する場合は、一応外皮を剥ぎ取つてから石器に割るのである。然るに庚申山の頁岩縞は土中に埋まつてい



第15図 酸化砂鉄鉱（庚申山A）

ため、縞の表面は晒されておらず、多くはすべすべした。はだ。になっている。それで庚申山頁岩縞は表皮がそのまま使用に耐えるので、縞面をつけたままの石器や剝片が多い。然し、チヨコレート色のものに比し強化度も劣り製作にあたつて剝離の観察に欠けてい

るので、必ずしも最適とは言えない。けれども材料は無限と言える程あり、何時でも自由に得られる便益から、附近に在住した初期の住民は好んで使用したであろう。

寒河江市長岡山で標高一五五mの地点にも、庚申山と共通した頁岩礫を含む砂礫層があり、製作様式も共通したものが採取されている。これ等の剝片が甚だしく粗雑な印象をうけるのは、剝離の技術の外に、石質の劣ることが考えられる。庚申山採取の勝れた剝片・石器は、何れも石質そのものも勝れていることに気付くのである。

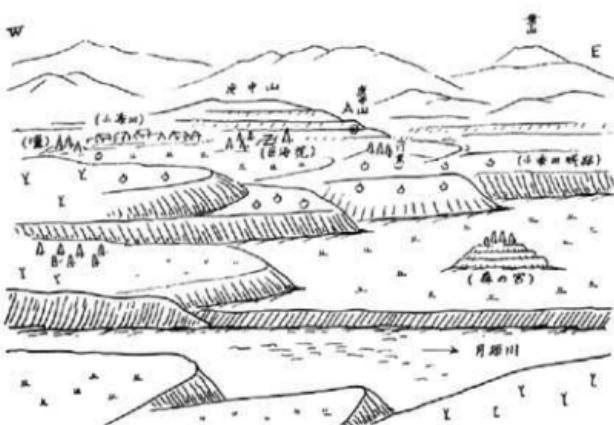
② 庚申山 A 遺跡

この遺跡は庚申山河段丘の東部山麓標高一四八mの地点にあり、この場所に達するには、巨海院山門附近から通ずる農道を北に進み、庚申溜池碑附近で分岐してから傾斜している農道を四〇m程西に昇り進めばこの道路の下側にある。この地は左沢の森村義三郎氏所有の桃園で、剝片の散在について高山法彦が気付いたことは前述の通りである。

遺跡の地層をみると、第一層六〇cmは農道工事の際に置き土したものらしく、攪乱されたものである。第二層はいわゆる表土層で五〇cm。第三層は有機物を多量に含む真っ黒な土層で三〇cm。第四層は酸化砂鉄層（褐鐵鉄）で一〇cmと一五cm。その下は河段丘を構成している褐色の砂礫層となっている。

勿論その下が第三系の左沢層で、この地の基盤となっていること

は庚申池附近の欠け崩された場所によつても推測し得る。

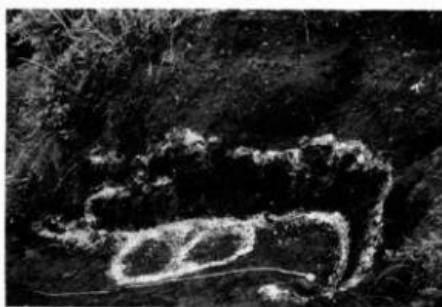


第26図 庚申山遺跡と月布川河段丘

この褐鐵鉄層に喰い込んだ形で、細長い一〇cm程度の礫を紙に二



第18図 三角石核
—庚申山A出土—



第19図 庚申山A遺跡
—石炭で描いた円は酸化鉄鉱層—

分は、酸化砂鉄
から出土した
ものの大部
分は、酸化砂鉄
のため褐色に染まっている。この特徴としては何れも粗製で石質
も劣る。それは当時良質の頁岩含有層が露出していないかったためで
あるか。それとも試験的に多くの種類の頁岩を剥いでみた場所で
あるか。尚附近一帯から土器は一片も出土しない。

つ割りにした
(ポイント
形) のが十
数個。その上
は頁岩礫から
剥ぎとった残
りの、いわゆ
る三角石核が
八個、始状の
刃器型剝片八
個、削器と予
想されるもの
五〇個出
土したが、当遺
跡を初めて見た
時は、何となく
石剥ぎ場の様な
印象をうけた。
ここから出土

屑のため褐色に染まっている。この特徴としては何れも粗製で石質
も劣る。それは当時良質の頁岩含有層が露出していないかったためで
あるか。それとも試験的に多くの種類の頁岩を剥いでみた場所で
あるか。尚附近一帯から土器は一片も出土しない。



第20図 庚申山B遺跡
—始形の剝片(石刀)を
剥いだあとを残す石核—

この遺跡は庚申山河段丘の中腹標高一五五mの地点に位する。A
遺跡の西五〇m程度西方に昇ったところで、天保一二年と記録され
た庚申万年堆があり、附近は平坦に均らされているが、もともと丘
の中腹に細長い平地が等高線上に伸びていたのである。
昭和四二年三月四日庚申塔前四mの地点を地質調査のため試掘し
たところ、上部第一層は七五cmで擾乱され置き土となつており、黄
褐色の底土が疊らに交つてゐる。第二層は六〇cmでいわゆる表土。
これにはA遺跡に見られた様な有機質を含んだ真っ黒な腐蝕土は見
あたらない。砂質の壤土が秋き荒い砂層に移行するが、その境が五



第20図 庚申塔前の地層調査

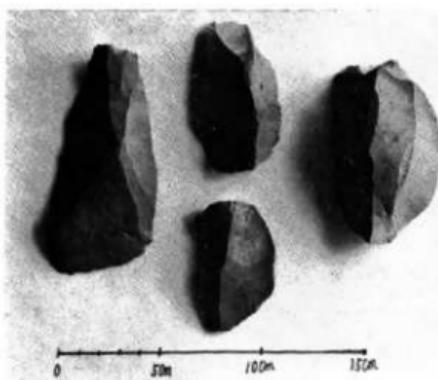
この時第21図の石刀型剝片出土

沖津（教） 沖津 高山 佐藤 柏倉

cm程度の漸移層となつてゐる。即ち第三層である。第四層は粒の荒い砂層で褐色を帶びてゐる。その下部が砂礫層であることは附近の欠け崩れた場所に微し推考出来る。

この第四層に喰い込んだ形で七cmと一〇cm程度の刃器型剝片四個（第22図）が出土した。この中腹B遺跡附近は庚申山地区中では最も整った石器が採取された地帶で、舟底型状の石器二個、その他多数の剝片、石器類が採收された。

思うに、當時この附近に比較的良質の頁岩礫を含んだ砂礫層が露出していたであろうか、黄褐色のスベスベしたもので光沢がある。



第22図 前回庚申山B遺跡出土の石刀型剝片



第21図 庚申塔前地層調査のため試掘の実際

この土地独特の頁岩を好んで材料としたようである。勿論舟底型状の石器もこれを材料とした。

④ 庚申山 C 遺跡

庚申山の西端は鞍部になつてゐる。この鞍部の南及び北の斜面一帯は窪地で、湧泉帶となつており、數カ所に優れた清水がコンコンと湧き出している。北斜面一〇m程下ったところの二カ所の清水からはじまつているが、この比較的温度の高い地帯を利用して林檎園が經營されている。

この地が特に湧泉帶となつてゐるのは、鞍部の窪地に浸透した雨水が、地下の地盤となつてゐる左沢層、又は河成沈澱粘土層などのために、その上部に滞留したものが外部へ湧出するものであるらしい。しかもこの附近の表土層は極めて薄く、下層は砂礫層になつてゐるので、浸透作用を容易にしているようである。

こうした鞍部の湧泉に恵まれてゐる地は、古来人間生活とのつながりを示し、初期における原住民の生活には好適の場であったにちがいない。

附近一帯から庚申山頂にかけて多くの剝片が採取されたが、特に湧泉帶附近には刀器型剝片が多い。地質調査のため試掘の結果、腐蝕質を含んだ表土層の5cm以下は漸移層5cm程度、その下は庚申山河段丘を構成している砂礫層である。剝片は第二層の漸移層に第25回写真の如く、同一平面に居て砂礫層に突き込む形となつてあつた。

尚、庚申山一帯に土器は見当らない。



第23回 庚申山鞍部の地質調査

—表土はうすいんだね—

沖津 佐藤 柏倉



第25図 剣片土中のあり方
一庚申山山D、底土にくい込んで形で散在していた一



第24図 庚申山膝部の湯泉地帯
一普通田面から比高25mのところにも田がある一

(1) 望山遺跡の石器類(第26・27図)

一、縦長剣片

現在まで、望山遺跡から採集された剣片類は約200点である。二点を図示した(第26図1-12)。一〇センチ前後の比較的大形の剣片群と五六センチを標準とする小形剣片群とに大別出来る。ならかの二次加工の施されている剣片は四点である。

1はやや部厚い剣片である。打面(上端の平な部分)はほとんど残らず、打痕がわずかにみられる。正面の左側縁に角度の浅い二次加工がある。主要剣面(背面)には二次加工が及ばない。先端部は意識的に折ったのかどうか不明である。

2は小形の比較的、形の整った縦長剣片。正面には二条の縦線が平行して走る。先端部に押圧剝離が加えられ、縦形搔器(エンドスケレーパー)のような形態となる。長さ五四mm。

3は大きな打面をもつ不整形剣片。剝離角は一二〇度。4・5は基部の欠損した剣片。

5の背面(主要剣面)先端にリタッチ(整形加工)が加えられている。6は正面中央に一条の破線が走る。先端は櫻井破砕(ヒンジフラクチャ)をなし、自然面を残す。

9・10は不定形の中形縦長剣片。9は打面が不明で部厚い。自然

四 出 土 石 器

面が左側縁に観察される。10は扁平な剝片。幅広の、打面の小さい不整形をとる。11は正面両側縁に自然面を大きく残した幅広の剝片。打面は比較的小さく主要剝離面の湾曲が著しい。二次加工は側縁、背面にも見られない。

12は、正面に二条の稜線が走り三つの剝離面で構成されている。先端部は鋭く尖り左側縁に二次加工がなされている。望山からこれまで採集された綫長剝片のうちでの典型である。

二、石核

採集された石核は、全部で七点である。

すべて、硬質頁岩を原材とする。基本的には円錐形の形態を備えるが、なお変形がある。大きく三群に分類できる。

(1) 第一類は単打面の円錐形石核の仲間である。本類は望山の石核の主流であり、七点中五点が所屬する。第26図の13・14、第27図の3と5がこれに該当する。

第26図13は半調整打面を持つ長円錐形石核である。打面と剝離面とのなす角度は90度に近い。両側面に原縁の自然面を残しているから、剝離作業が始まつばかりの段階である。高さ68mm。

14は望山の石核中、最も丹念に調整された打面をもつ円錐形石核である。梢円形状の大きな打面の全周縁から平均した剝離作業がくり返されたことを示している。側面に緻密な剝離面を見せる。打面の長経と剝離面の高さが62mmとほぼ同長であるため、側面は正三角

形状を呈する。

第27図の3は、第26図の14と同類の石核である。調整された大きな打面が特徴である。このため、短円錐形となる。この種の石核から得られたフレイク(剝片)の剝離角は一二〇度前後となる。4は、凹面の半調整打面をもつ石核で、望山の石核の典型であろう。剝離は周囲に亘るが、正面と背面の剝離作業が優越するため、先端は扁平となる。

5は、チョコレート色の色質の頁岩を原材としている。剝離作業が再調整された打面の片面から集中的に行なわれるという技術工程の結果、平面に原縁の自然面を残す。側面に五条の剝離面を並列させている。

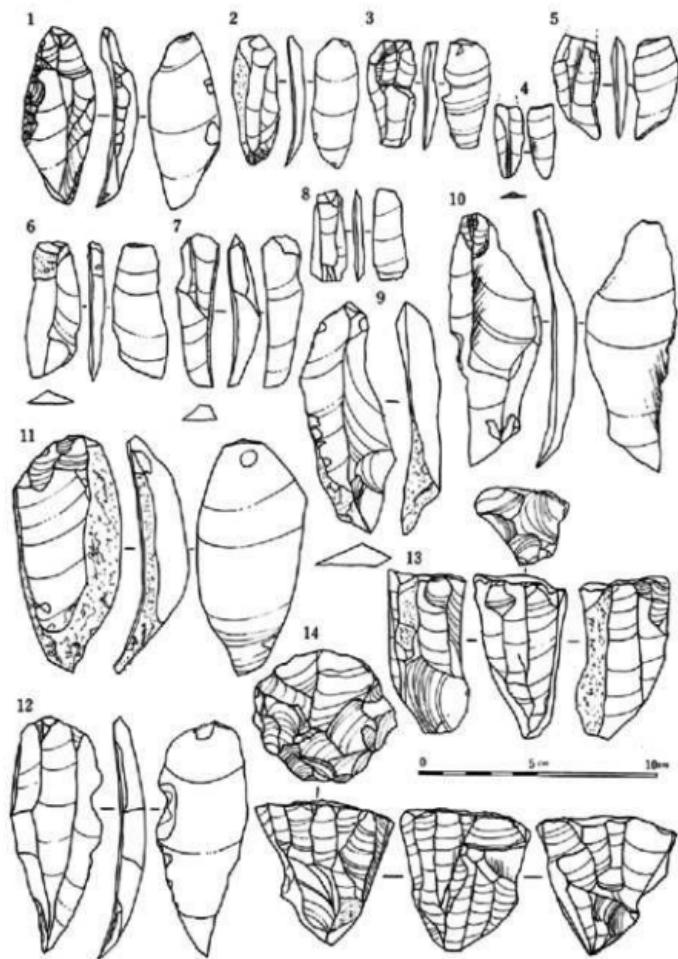
(2) 第二類は上下両端に打面を備える石核である。第27図の1がこれである。

剝離工程は、上下の両打面から交互に行なわれるではなく、ほとんど上端の打面に依存している。このため、円筒形とならない。下端の打面は非調整である。

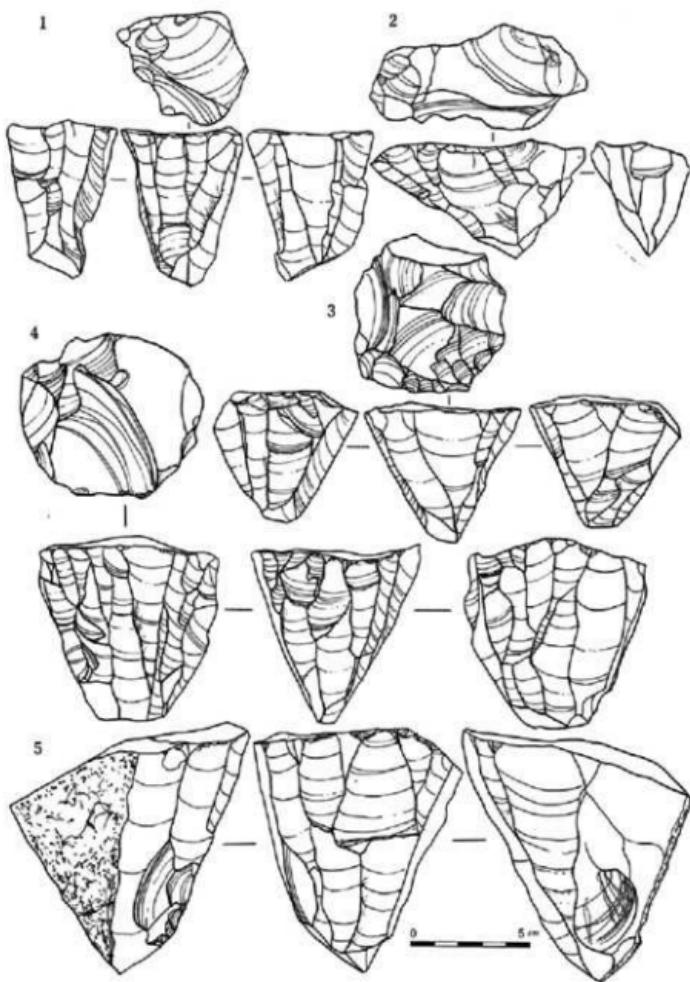
(3) 第三類は、いわゆる舟底形をとる石核である。第27図の2がこれに属する。打面は不規則な剝離面によって凹凸をなす。剝離は定則的でない。いかなる目的をもつ石器か石核か検討の要がある。

以上望山の石核を概観したが、共通的な要素を挙げると、

① 円錐形石核を基本とする。



第26図 望山遺跡の石器類(その1)



第27図 雲山遺跡の石器類（その2）

- (2) 全般的に打面が大きい。
(3) 打面は調整打面を基本とする。
(4) 自然面を残存するものが多い。ことなどが指摘できる。

さて、望山の石器文化に一定の解釈を与え、評価を下すことは、現段階では困難である。表探資料であるため、資料としての根本的な弱点を免がれることによる。石器の組み合わせ・形態・出土層位が正確に把握された時、望山の石器製作技術が解明される。單に、石器の形態論に根拠をおく解釈は危険であるが、一応の予察をしておきたい。

望山石器文化は石刀技法の原則に立っていると判断出来そうである。特に石核に石刀技法の定則性がうかがえる。一応先編文化の範囲の中で評価できそうである。しかし石刀と判断出来る資料が含まれていないのが気がかりである。文中で石刀核・石刀の名称を使ふことを避けたのはその意味からである。

(2) 小見遺跡(第28図)

小見遺跡から採集された一四点の石器類を第28図に示した。以下挿圖を中心に簡単に説明を加えよう。

A 摂器類

第28図の1は縦長剥片(石刀刃)を利用した摂器である。左右両側縁と正面中央の稜線が互いに平行して走る。打面・打瘤とともに小さい。背面(主要剝離面)先端は、やや瓣番破碎(ヒンジフラクチャ)。

7・8はともに、先端を欠失したやや幅広の剥片。打面はやはり小さい。8は打面から両側縁にかけて緻密なリタッチ(整形加工)を加えている。

B 縦長剥片

第28図の4は図示した一一点の剥片中、最も形の整った縦長剥片である。正面には二本の稜線が走り、剝離面を三面並べている。左側縁は弓状に彎曲し、右側縁には自然面をとどめている。

主要剝離面とは逆方向からの剝離面をのぞかせているのが注意される。打面は小さく、剝離角は九〇度に近い。先端を欠失している。幅二四mm。5は短冊形をした不整形剥片である。二次加工は全く観察されない。6は、三角形の大きな打面を残す剥片。自然面を残し、基部がねじ曲がっている。幅二二mm。

1) をなす。正面先端部のリタッチ(整形加工)は明確でないが器の形態論からすれば縦形摂器であろう。長さ九一mm、幅二八mm。2は打面を大きく残す縦長剥片を利用した石器である。先端、および右側縁にも二次加工が加えられているが、左側縁により集中した加工が施される。サイドスクレーバー(側面に刃のある摂器)かナイフ形石器であろうか。長さ六五mm、幅二七mm。3は部厚い剥片を摂器につくり上げた。先端から左側縁にかけて整形してある。基部を欠損しているが、摂器としての典型的な形態を備える。幅三〇mm。

9は幅広の剥片。打面から先端部に行くに従い幅を増す。二次加工は全くなく、第一次剥離のままである。先端に自然面を残していいる。長さ五四mm、幅三〇mm。

10は基部、先端とも欠損した薄手の剥片である。全体形が長方形をなし、両側縁に沿って二条の稜線が縱走する。幅二二mm。

11は打面の小さな、細長の小剥片。先端を欠く。幅一八mm。

12は、中ふくらみの小形縱長剥片。側面、背面とも加工が見られない。長さ六八mm、幅二一mm。13は先端の尖る剥片。正面右側縁に自然面が認められる。二次加工全くない。長さ七〇mm、幅二二mm。

14は広幅の不整形剥片。正面には逆方向からの剥離がある。長さ八八mm、幅四〇mm。

小見遺跡の性格を論ずるには、なお基礎的な作業の集積を俟たねばならない。

確かに、先繩文時代の搔器とおぼしきものが含まれている。打面が小さく、剥離角が九〇度に近い剥片のあるものは、石刀と酷似する。しかし、こうした要素をもつて、小見遺跡を先繩文時代の遺跡として、積極的に認定することは、現段階では急かな結論であろう。層位的把握をおかず、石器の型式論から、單に類似点をひき出して、石器文化の性格を云々することは常に危険をともなう。小見の石器群には先繩文文化的要素は見られるが、先繩文文化の階梯でとらえられるかどうかは、今後の研究課題として保留したい。

い。

(2) 庚申山遺跡(第29図)

庚申山の遺跡付近からは、頁岩製の夥しい石片が採集されている。そのほとんどは、単なる不定形の剥片である。自然の営力によつて、物理的に破碎されたと思われる石片を含む。ある種の石器を意識的に製作する過程で生じた人工的剥片なのかどうか、判断に苦しむ石片が多い。

第29図に図示した一〇点の石器類は、人工作品として確實に認定できるものである。

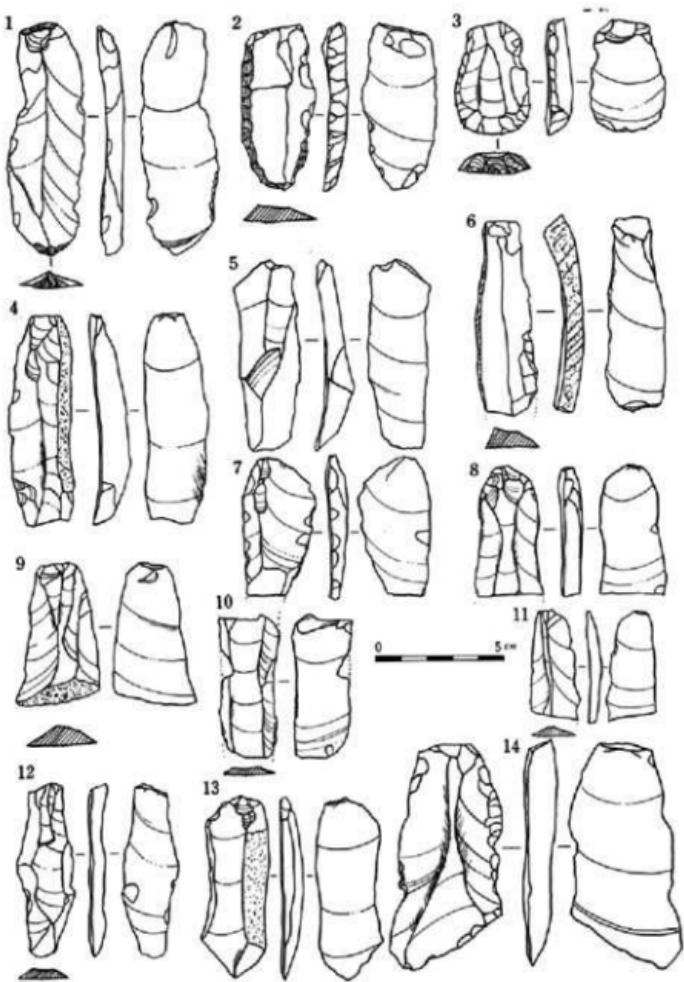
1は中央に稜線が走る、幅広い縱長剥片の周囲に、角度の深いリタツチ(整形加工)を加えて完成している。左右の側縁は次第に広がりをみせるが、やがて幅を縮め最先端で交わる。全体形は菱形となる。背面には、原則として加工がなく第一次剥離のままである。

長さ七〇mm、最大幅四一mm。

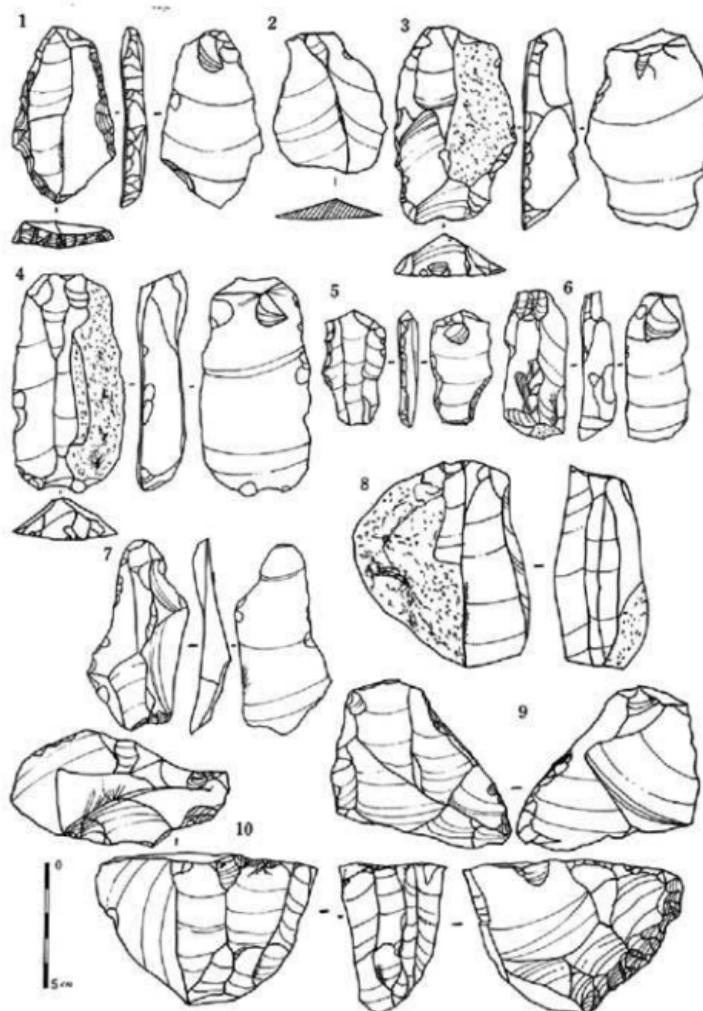
3は、打面を大きく残す。部厚く幅広の縱長剥片。正面中央の稜線から左側縁にかけて自然面を大きく残す。又、背面(主要剥離面)の剥離方向とは逆の方向からの剥離が観察される。先端部の二次加工は粗雑で、所謂、搔器の刃部として認定することはむずかしい。

長さ八〇mm、幅四七mm。

4は3と同じく、部厚い縱長剥片であろう。全体形が短冊形をなし、正面に二本の稜線が縱走する。右側縁に沿って、原石の自然面



第28図 小見道跡の石器類



第29圖 庚申山遺跡石器類

を残す。先端部には加工らしきものがある。縦形搔器の刃部を作るという意図が不明確である。搔器として扱うには根拠がうすい。剝離角は約一三〇度で大きい。長さ八七mm、幅四五mm。

5は、正面中央に二本の稜線をもつ小形剝片を利用した石器であろう。大きな打面から左側縁中央にかけて、リタッヂ（整形加工）を加え、つづいて主要剝離面（背面）の先端まで加工が及び、リタッヂは、むしろ、主要剝離面に優勢である。長さ四六mm、幅二三mm。6はやや細身の剝片。正面、打面に近く剝離調整痕が密集している。打面、打痕剥痕（バルバースカー）、ともに大きい。

7はプラットフォーム（打面）の小さな不整形剝片を利用した石器であろう。正面先端に逆方向の剝離が見られる。左右両側縁には原則として加工はない。先端部に加工を施して、凹形の刃部を作り上げている。コンケーブ・スクレーパー（中凹みの搔器）の一種であろうか。長さ七五mm、幅三五mm。

8は台形状の剝片を利用した搔器の仲間であろう。正面、右側縁にリタッヂがある。長さ六五mm、幅五四毛。

8・10は石核である。

8は原核の上部先端に横撃を加えて、平坦打面をつくり、そのまま打面として利用した非調整打面である。剝離は一方の側縁にだけ加えられ、大部分が原核のままである。高さ八七mm、幅六五mm。

五、附記

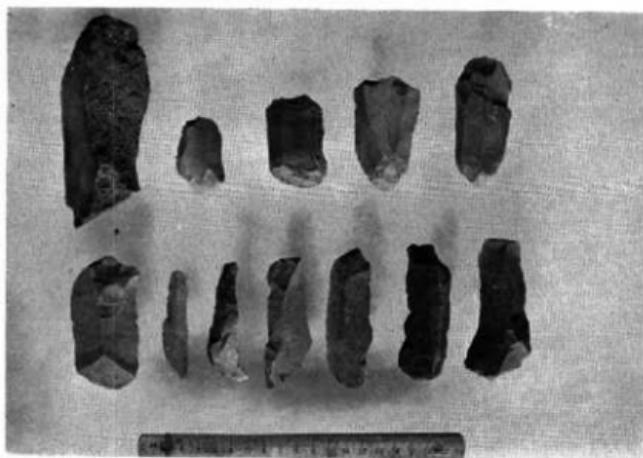
(一) 下原出土地

漆川一帯から鉄片が出土している。例えば羽黒・塙・下原・下下原等であるが、下原Aは大字本郷字下下原己二三二で、大字本郷己ノ一九公平与呂氏所有地付近一帯である。ここは標高一二〇mに位し、小見遺跡の対岸にある。月布川からは五〇m・一〇〇mの近距離で、河床からの比高一五mである。

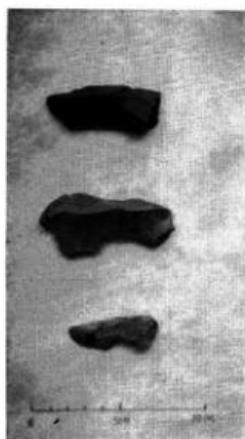
月布川はこの付近で大きく南に（小見側）に蛇行し、対岸を削つて崖をつくっている。牧ヶ所地層調査の結果、第一層は置き土・表土は二五cm・三〇cm。第二層は漸移層五cm。第三層は砂礫層でこの河段丘を構成しているもの、第四層は左沢層（小見層）で第三系鮮新世層である。

下原杉林の中では、第二層の漸移層（第一層は置き土、および表土）から石刃型剣片が出土した（第31図・32図）。

尚、第30図上段の向って右から四点は搔器（エンドスクレーバー）に属する。



第30図 下原出土の石器と剣片



第32図 前回の制片



第37図 下原杉林内の層序と石刃型
制片の包含状況



第33図 下原Bの地層調査

高山 渡辺教育長 沖津

(2) 橋上出土地

当地帶は月布川口から西（上流）へ六畳、七軒街道の橋上バス停留所から北に三〇〇m、北部の月布川床に向かって、なだらかな傾斜となっている。この地は、月布川が北に逆行し、向岸に当たる小新部落の南端を削り崖になつていて、また、標高一三〇mの月布川床から第一段丘比高一三m、第二段丘比高一二mと二つの河段丘より成り、遺跡は第二段丘標高一五五mの地に含まれている。

付近は数年前、ホップ畑を經營するために、東西一〇〇m、南北三〇mの場所の表土が天地替えされた。採取された石器はこの際浮き出たものであるらしい。付近一帯の地層序は、第三系中新世の橋上層が基盤になり、その上が河段丘を構成している砂礫層、その上に二〇cm程度の黄褐色ローム層と思われるものが認められ、ローム層の上が表土との漸移層。表土は二十五cmと三十cmの黒土になつてゐる。

尚、第34図、第35図は橋上の渡辺正見氏の採取によるもの。



第35図 橋上遺跡出土の縦長形石器と片状



第34図 橋上遺跡出土石核



第36図 橋上遺跡 一前面のホップ圃一

第37図 橋上遺跡と河段丘



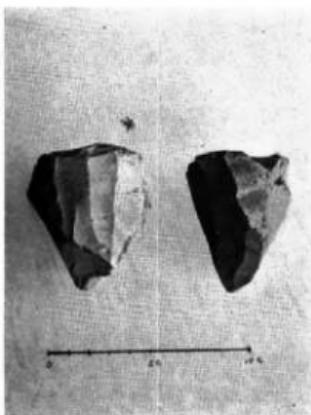
(三) 向原出土

向原は月布川河口の東向いの台地で、左沢小学校の最上川向いに位置する。標高一五m。昭和の初期までは、寒河江市地内になつてゐる。一帯は松林又は桑園であつたが、終戦の頃から水田に開拓された。

最上川床からの比高一五m。

この台地は主として最上川による河段丘で、如何にも原住民の生活がうなづかれる台地である。層序は左沢層が基盤となり、最上川岸に浸蝕された露出断面が見受けられる。その上にこの河段丘を構成している砂礫層の堆積で、その上を五〇cm程度の表土が覆つてゐる。

ここから出土した核石をみると、これまで紹介した望山・橋上に比し第38、39図に示すごとく剝離が一層覗く、美しい種状を示している。核石の外に縦長剥片も數個採取されているが、資料不足のため今後の研究に待たねばならぬ部分が多い。ともかく、石核や剝片の形態からみて、今後が期待される地帶である。

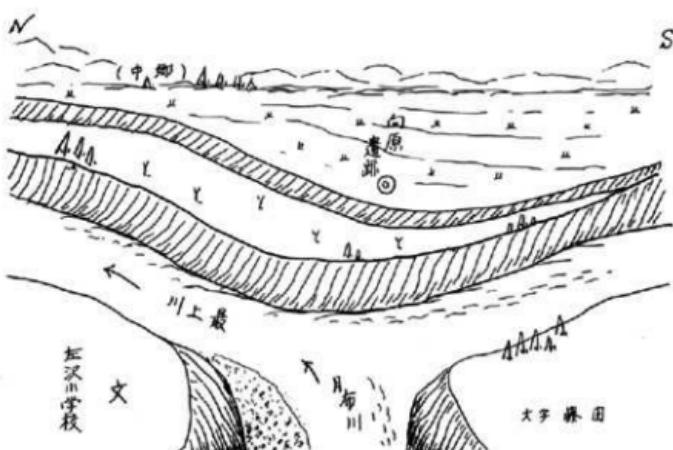


第39図 向原出土の石核



第38図 向原出土 石核と剝片

第40図 向原道路と河段丘



第41図 向原河段丘



下は最上川、帶状の白い線は左沢層の露出面、杉の根元まで第一段丘、頂点が第二段丘に当たる。月布川口より撮る。

六、結　び

以上、月布川下流沿岸における、六カ所の古式石器出土地帯について紹介したが、これらの中には前述の通り、現段階において、すでに先編文時代のものと予想されるものが、かなり出土している現況にある。従つてこの報告書も、今後における月布川一帯、及び最上川中流における研究への、一つの足がかりになることを念願して進めたものである。

これが大江町当局並びに町民の方々の要望しておられる、大江町における原始時代の生活を推考するための一助ともなれば、幸甚と考える次第である。勿論、今後六カ所以外にも出土地帯が予想されるし、現に出土しつつある地帯もあるので、今後の進め方によつては、更に系統的で組織的な考察が可能となることは勿論である。あらためて、引き続き検討を要すべき部面について述べると、

一、月布川沿岸に連なる河段丘を構成している堆積層の年代的考察。

二、小見・庚申山・橋上・寒河江市高瀬山を結ぶ一連の表土層の下に介在する、黄褐色粘土層（ローム層？）に対する解釈。

三、庚申山堆積河段丘の一部は頁岩礫を含んでおり、この礫を利用して石器を作った訳であるが、こうした出土礫のままを利用した実状については、まだ発表された例が見当たらない。比較すべき

資料すらない現状である。

従つてこのことについては、研究者は更に自分で何度も貢献を割ってみて、その積み重ねによる体験から生み出された検討が必要であると考える。

四、出土地帯の中には石核と搔器との組み合わせにより構成されている場所もあるが、これは一つのケースとして、他の遺跡との比較対照によつて、より確かに解釈されるものと考える。

五、河段丘の標高、並びに河川からの比高及び四隅の環境と、古式石器との関連性についての検討。

要するに、出土資料の形態的考察と共に、正式な発掘調査をすることによって、より科学的な立場の立証が可能となり、特に表土から底土に至る層序を正確に把握することによって、より適確な解釈が生まれ、眞の成果を挙げ得るものと深く期待する次第である。

昭和四十二年三月三十日発行

山形県西村山郡大江町

発行者 大江町教育委員会

山形市和合町二丁目二番地

印刷者 武田紙工株式会社
武田好吉